
箱庭

さくま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
箱庭

【Nコード】
N9299P

【作者名】
さくま

【あらすじ】
これはゲームです。

クリア条件は3つ

?鬼を見つけること

?1000万ポイント稼ぐこと

？最後の1人になること

＊上記の何れかの条件を満たせばクリアです。

＊クリア条件を満たすまでここから出られません。

―私立早川高校の3年1組の生徒40名と教師・ゲスト含む大人10名は悪魔のゲームに巻き込まれた。

果たして主人公達は無事にゲームをクリア出来るのか

箱庭の決まり／猿でもわかるルールブック／

【参加者の皆様へ】

1. ゲーム開始の時点で、参加者には全員に10万ポイントずつ与えられる

＊ポイントは参加者に与えられたカードで確認可能

2. 1人殺す毎に持ちポイントは2倍になる。（持ちポイント0の者が人を殺した場合、5万ポイントが与えられる）

3. 食料、武器、その他生活必需品はポイントでのみ購入可能

4. 他人のカードを使用して物品を購入することは出来ない

5. カードは再発行が可能。ただし、カードが壊れた場合に限る。

6. カードが壊れた時点で持ちポイントは0になる。

7. 参加者はクリア条件の内、何れかを満たさなければ箱庭を出ることは出来ない。

8. 今回の参加者は50名。（鬼も含む）

【クリア条件】

？鬼を見つけて、指名すること

？1000万ポイント稼ぐこと

？最後の1人になること

＊鬼を指名出来るのは1日一回まで

＊鬼を指名するのに1万ポイントが必要

＊鬼は正体を見破られ、指名されたら死亡

＊鬼を見破った人物には1000万円が贈呈される

＊指名された人物が鬼じゃ無かった場合、慰謝料として指名した人物のポイント全てが指名された人物へ譲渡される

＊鬼が1000万ポイント稼いで脱出した場合、クリア条件？は消滅する

＊鬼がクリア条件？を満たした場合、100億円が贈呈される

【ポイントの稼ぎ方】

- ・人を殺す

- ・ランダムで開催されるイベントで勝利する

＊イベントは不定期で開催

＊イベント毎に内容・賞品は違う

＊他にもポイントを稼ぐ方法はあるかも…

【クリア後の話】

・クリア条件？を満たした場合、その時点での生存者全員が脱出可能。

生存者の持ちポイントは1ポイント⇨1円にて換金することが出来る

・クリア条件？を満たした場合は、1000万ポイント稼いだ人物のみが脱出可能。持ちポイントから1000万ポイント引いて、残ったポイントを1ポイント⇨1円で換金することが出来る。（鬼は残りポイントを換金することが出来ない）
残った参加者達でゲームは続行される。

・クリア条件？を満たした場合、持ちポイントは10倍になる。1ポイント⇨2円で換金される。（鬼は100億円とは別に、ポイントを換金出来る）

【注意事項】

- ・他人のカードを強奪して、使用してはいけません
- ・殺人は許されますが、強姦はいけません。

- ・ゲームを長引かせるため、1日に1人の人間が殺している数は、3人までとします。

- ・上記のルールを守らない場合は、問答無用で処刑されます。

【それでは参加者の皆様、ゲームをお楽しみ下さい】

悪意の始まり

そこは薄暗い部屋だった。

部屋はとても広く、ソファや筆筒が置いてあり、人が生活していることが見てわかる。

ただ、その部屋は異常だった。壁一面にモニターが埋め込まれている。

部屋の主はモニターを覗き終わると満足気に微笑み、そっと呟いた。

「今回の生還者は1人だけか。やっぱり、このゲームは楽しいよね。人間の本性が見れる。君もそう思わないかい？」

問いかけられた相手は、声を出さずにモニターを凝視しながらただ頷いた。

「うん、君も気に入ってくれたようで嬉しいよ。今回のゲームはなかなか盛り上がったからねえ。」

部屋の主は楽しげに呟いた後、やっとその顔を訪問者に向ける。

「今日、君をこの部屋に呼び寄せたのはね、君に頼みたい事が在るんだ。」

訪問者は訝しげな顔を向け続きを促す。

「3年後に再びゲームを開く。君にはそのゲームに鬼として参加し

て貰いたい。だからね、君に高校生として潜入して欲しいんだ。」

これはゲームが開催される3年前の話し――

プロローグ

高遠 蒼也の評価を他人に聞けば、10人中10人がこう答える。

「普通である」と。

成績は3学年240名中120位、運動は何をやらせても人並みには出来るが、決して上手くはない。容姿も平凡で、身長も平均的。性格は冷静で穏やかであり、誰に対しても態度が変わらない。高遠 蒼也はそんな人間である。

今日、彼が籍を置く私立早川高校3年1組はクラス会を開いていた。ほとんどの生徒が就職や進学を決めており、最後のクラスでのイベントとして、3年1組の生徒40名全員とお世話になった教師やゲストなど大人10名を招いて、バスを貸し切り、旅館に向かっていった。

「いや、本当にラッキーだよな。クラス全員で温泉に行けるなんて。こんな豪華なクラス会開けるのうちらぐらいじゃねえのか？」

そう蒼也に話し掛けるのは、蒼也の「自称」親友である山村 王子である。

彼は、王子という名前がピッタリ当てはまるぐらいにイケメンであり、女子に大変もてている。性格は熱血漢で、女の子には優しく、まさにラブコメの主人公のような人物だ。

優柔不断で、女の子の誘いを断ることが出来ずに、クラスでハーレムを形成している。

今もハーレムのメンバーが王子と話したそうに、こっちをチラチラと見ている。

そんな視線を無視して蒼也は答える。

「そうだね。でも、何で温泉旅行になんて行けるんだろう？旅費だって払ってないし、バスだって貸し切りだし…。お金はどうするんだろうね？」

「何でも、宿泊先は麗火の親父さんが経営してる旅館らしい。だから、宿代は無料でバスも旅館のサービスなんだと。」

「へえ、だからか。天上院さんには感謝しないといけないね。」

話しに出てきた麗火とは、彼らのクラスメートである天上院 麗火のことだ。彼女は、日本が世界に誇る天上院グループの1人娘で『王子ハーレム』を構成するメンバーの1人だ。

彼女は美人で、成績も優秀なのだが、王子以外の男子には態度がきつい。特に王子と仲が良い蒼也は、目の敵にされていて、何かにつけて絡まれるので蒼也は麗火を苦手としていた。

「王子くん。そんな人と話してないで、こっちに来て私達とお話しようよ。」

噂をすればなんとやらで、王子と話す隙を伺っていたのか、天上院
麗火本人が有無を言わず、強引に王子をハーレムメンバーが集
まる一角に連れていく。

麗火にひきづられながらも、ジェスチャーでこちらに向かって謝罪
の意を伝えて来る王子を苦笑いと共に見送り、蒼也はそっと辺りを
見渡す。

バスの前の方では大人達が集まり、今夜の宴会の相談をしている。
後ろの方では、男子のみで集まりPSPをするグループ、男女混合
でトランプとお喋りを楽しんでいるグループ、イチャイチャしてい
るカップル、王子ハーレムの中心で、女の子達に抱き着かれて赤面
している王子を嫉妬と憎悪の目で睨んでいるグループなどがある。

蒼也が視線を窓から見える景色に移し、ボートしていると、横か
ら声がかかった。

「隣が空いてるなら、座ってもいいかしら？」

蒼也が意識を覚醒させ、肯定の意を示すと彼女は蒼也の隣の席に腰
を下ろす。

彼女の名前は、白鳥 雪姫。名前の通り雪のように白い肌を持ち、
黒真珠のような光沢がある腰まで伸ばしたロングストレートの黒髪
を持つ、学校一の美少女である。

成績は学校で1位、運動神経抜群、性格は大和撫子を地でいくものであり、当然にファンクラブがある。

学校の男子生徒の3／4が彼女に告白しているとの噂があるが、全員振っていて彼氏はいない。しかも、珍しいことに、美少女なのに王子ハーレムのメンバーでは無いので、クラスの男子生徒の殆どが彼女を狙っている。

その証拠に、さっきまで王子を睨んでいた連中がターゲットを雪姫の隣に座る蒼也に移している。

そんな視線を背中に感じて、冷や汗をかきながら蒼也は雪姫に話し掛ける。

「白鳥さん、僕に何か用事でもあるのかな？」

「あら、どうしてそんな事を聞くの？」

「だって、僕達そんなに親しくないし、用がなければ僕の隣になんかこないと思って…」

蒼也の返答を聞くと、雪姫は妖艶に微笑み、蒼也に告げる。

「そんな事はないわ。私はずっと貴方と仲良くしたかったの。いい機会だから貴方とお話ししようと思ってね。」

「えっ？それってどういう…」

蒼也が雪姫に問いかけようとした時、「ガシャン！！」と前の方から窓ガラスが割れる音がした。

何事かと前方に目を向けると、前の車からバスの中に手榴弾のような物が投げ込まれた。

手榴弾のようなものから白いガスが出始め、次々とバスの乗客の意識を奪っていく。

蒼也は、ガスマスクを着けた複数の人影がバスに乗り込んで来る光景を最後に、意識を手離した。

1話：始まりと絶望を告げる鐘

——あんたがいけないのよ。全部あんたが悪いのよ。

——止めてよ、そんなので殴られたら死んじゃうよ。

ごめんなさい。ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。許して下さい。もう、殴らないでください。ごめんなさい。

——「ねえ、ちょっと大丈夫？ 高遠くん、起きて。」

そんな声と共に、体が揺すられる感触で蒼也は目を覚ました。

目を開けると、雪姫の綺麗に整った顔が目の前にあった。

思春期の男子なら、誰もが動揺せずにはいられないシチュエーションだが、蒼也は全く動じずに返事をした。

「おはよう、白鳥さん。そんなに慌ててどうしたの？」

「どうしたの？ じゃないわよ。バスで眠らされて、目が覚めたら教室にいるし、皆寝てるし…。高遠くんがうなされてるみたいだから、起こしてあげたのよ。」

そんな雪姫の言葉を受けて、辺りを見渡すとそこは蒼也が3年間通った学校の教室と殆ど変わらない光景だった。ただ唯一違うのは、クラスメイトが全員机に突っ伏して寝ているだけ。

蒼也と雪姫を含めて、私服だったはずのクラスメイト達が全員制服を着ているので、余計に教室を連想させた。

そんな光景を見て、ようやく蒼也はバスの中の出来事を思い出した。

「どう思う？ 高遠くん。これって手の込んだ誘拐なのかしら？ いつの間にか、私服から制服に着替えさせられてるし…。」

「どうだろうね。でも、誘拐の可能性は高いと思うよ。気を失う直前に人影を見てるしね。ただ、分からないのは目的だね。」

「目的？ 誘拐ならお金目当てじゃないの？」

「それだとわざわざ制服に着替えさせる意味がわからないよ。それに、この教室は僕達3年1組の教室に似すぎている。僕には、金目的の誘拐とはとても思えない。」

二人で犯人の目的について想像を巡らせていると、漸く他のクラスメイト達が起き始めた。

最初は皆、状況を把握出来ずに戸惑っていたが、元生徒会長であり、クラスでも人望が高い赤松 賢が何とか皆をまとめ、今は落ち着いてる。

「皆、聞いてくれ。俺達はどうやら誘拐されたみたいだ。」

皆、誘拐という言葉にパニックにおちかけるが、すかさず赤松が言葉を紡ぐ。

「一緒にいた先生達がどうなったかはわからない。ただ、俺達は拘束されてないし、犯人の姿も見当たらない。だから、簡単に逃げられると思う。」

そんな、赤松の言葉にクラスメイト全員が希望を持った時、教室にあるスピーカーから声が鳴り響いた。

【レディス&am p; ジェントルメン。私立早川高校3年1組の皆様。テーマパーク『箱庭』によるこそいらっしやいました。当テーマパークでは、皆様に慣れ親しんだ環境で過ごして戴く為、早川高校の校舎を完全再現しております。】

突然流れた放送に皆が戸惑いの声をあげるが、放送はさらに続く。

【皆様には、これからゲームに参加していただきます。クリア条件は3つ。

？鬼を見つけること

？1000万ポイント稼ぐこと

？最後の1人になること

何れかの条件を満たすまで、皆様は家に帰る事が出来ません。】

その言葉に、戸惑いよりも怒りの感情が勝ったのか、男子のリーダー格に当たる岸田 一誠がスピーカーに向かって怒鳴り声をあげる。

「ふざけんな！！何で俺たちがそんなもんに参加しなきゃいけないんだよ。さっさと俺たちを家に帰しやがれ！！！」

岸田の言葉を皮切りに、クラスメイト達もスピーカーに向かって罵声を浴びせる。

すると、さっきの放送とは段違いの音量と迫力で怒鳴り声がスピーカーから聞こえてきた。

【何勝手な事言ってるだよ、このクソガキどもが！！てめえらは、文句いうことだけは一丁前だな！あれか？ゆとりか？ゆとりの弊害なのか？てめえらは、この放送を馬鹿みたいに黙って聞いてればい

いんだよ!! お前らの命なんぞ、この『箱庭』ではゴミより価値が低いんだ!! わかったら黙ってる!!!!!!】

ハウリングが起こるほどの大声とヤクザ顔負けの迫力に、罵声を浴びせていたクラスメイト達は黙り込む。

【静かになりましたので、説明を続けさせていただきます。皆様、お召しになっている制服の内ポケットをご覧下さい。】

蒼也が内ポケットを探ると、中には生徒手帳のようなものとクレジットカードみたいなものが入っていた。

手帳には「箱庭の決まりく猿でもわかるルールブック」と書いてあり、カードには100,000と表示されている。

【ご確認いただけましたか？手帳の方には、箱庭で過ごす際の基本的なルールが載っています。ゲームについてわからない事がございましたら、そちらの方をご確認下さい。ただ、注意していただきたいのは、そちらのルールブックに全てのルールが書いてあるという訳では御座いません。皆様がゲームを進める内に、他のルールブックを入手なされば、ゲームのルールを全て知ることが出来るでしょう。】

【続いて、カードについてご説明させていただきます。カードにはルールブックにある通り、10万ポイントが入っております。『箱庭』において、皆様が快適に過ごしていただくためには、ポイント

は必要不可欠なものなので、大切に使用してください。】

【最後に、皆様の活動範囲についてご説明させていただきます。先程ご説明いたしましたが、この『箱庭』は早川高校を完全再現しています。皆様が活動を許可されているのは、学校の敷地内のみです。ルールを破るとどのような目に遭うのか、いい例が出来ましたので校庭をご覧ください。】

その言葉に、皆が一斉に校庭の方を向くと、人影が校門に向かって走っていた。

人影が、校門の外に出た瞬間、「パンツ!!」とポップコーンがはじけるような音と共に、人影の首から上が消失した。頭を無くした胴体がゆっくりと崩れ落ちる。

皆が目の前の光景を信じられずに、啞然としているなか放送は続く。

【ルールを破ると、あのような目に遭いますので、決してルールを破らないよう、ご忠告いたします。それでは、皆様。説明にも飽きたと思うので、そろそろゲームを始めましょう。】

その言葉が終わると、大音量でチャイムが教室に鳴り響く。

【【キーン、コーン、カーンコーン。キンコン、カンコン】】

【ゲームスタートです。それでは、皆様。ゲーム終了時に生きてお会い出来るのを、楽しみにしています。】

1話：始まりと絶望を告げる鐘（後書き）

生存者：49名

死亡者：1名

高遠 蒼也の残りポイント

【100,000】

2話..「平常」故に「異常」

皆が、さっき起こった出来事を信じることが出来ずに、呆然としていた。

うなされたように、ぶつぶつと独り言を呟いている人物やドッキリだと思ひ込もうと、カメラを探す人物もいた。

まるで、自分たちに起こったこの状況を、夢にしてしまおうとするかのように。

その内の1人が、校庭にある首無し死体を見てしまった。その人物は現実には引き戻され、悲鳴をあげる。

「キャー——————！！！！！！」

恐怖は伝線する。教室にいるもの達は、狂気に飲み込まれ、パニックが引き起こされる。

「なんだよ、なんなんだよ、これ。」

「イヤー！！家に帰りたい。ママの所に帰して！！帰してよ！！」
「あの死体はドッキリだ。その内、カメラが来るんだろ？早く、カメラ出てこい！！」

幼児のように泣き叫ぶ者、怒鳴り声をあげる者、いまだに現実を認めようとしない者。様々な反応をしているが、皆に共通するのは、瞳の中に怯えが見える事だ。

雪姫は、そんなクラスメイト達を見て、自身も気が狂いそうになるのを自覚した。

気を抜けば、自分もパニックに陥ってしまう。恐怖から気を反らすために、さっきまで会話をしていた蒼也の方に顔を向けると、雪姫は固まった。

そこには、いつも通りの蒼也の、穏やかでのんびりとした顔があった。いつも通り過ぎる蒼也の顔があった。

恐怖を隠して、平常を装っている訳では無い。恐怖が一定量を通り越して、おかしくなった訳でも無い。

たった今、人が目の前で死んで、その犯人と思われる人物に家に帰さないと宣告されたばかりにも関わらず、余りにもいつも通りである蒼也の姿を、雪姫はとても不気味に感じた。

そんな雪姫の視線を感じたのか、蒼也は雪姫に声をかけた。

「大変な事になったね。今、死んだのは合流してない大人達の誰かな？」

大変だという事が、一切感じられない声でそんな事を聞かれて、雪姫は思わず激昂する。

「そんな事知らないわよ！今は、そんなの気にしてる場合じゃないでしょう！？今、目の前で、人が死んだの！！私達も殺されるかもしれないのよ！？もう、家に帰れないかもしれないのよ！？」

「落ち着いて、白鳥さん。犯人達は、家に帰さないとは言っていないよ。ゲームをクリアすれば、帰れるんだ。だったら、ルールに従ってゲームをクリアしたほうが良いだろう？」

「だから、何でそんなに冷静でいられるのよ！？あなたは……怖くないの？」

最後の言葉には、怯えの感情が混ざっていた。それはこの状況に対しての怯えか、蒼也に対しての怯えか、雪姫自身にもわからないことだった。

蒼也が雪姫の問いに答えようとした時、また放送が流れた。

【大変申し訳ありません。私とした事が……。皆様にお伝えし忘れた

ことが御座います。」

放送が流れた瞬間、教室で起こっていたパニックはピタッと沈静化した。

ただ、その代わり誰一人、動こうとも喋ろうともしない。

これから言われることを一言一句聞き逃さないように、皆が放送に耳を傾けた。

【10人以上の人間と、半径3メートル以内に10分以上いる場合、処刑されます。

今現在、ゲームスタートの鐘より5分たちました。後5分、皆様に固まっていますと処刑されてしまいますので、散らばる事をお薦めします。

放送は以上です。重ね重ね、お伝えし忘れたことをお詫び申し上げます。】

放送が終わった後、一瞬の静寂が訪れた。皆何を言われてるのか、理解出来ないようだった。

そんな中、クラス1の危険人物であり、教師ですらその存在を恐れるワグナー・螺旋はいち早く行動し、教室を出ていく。

その彼の行動を、呆然と静観していたクラスメイト達は、漸く放送の言葉を理解し、行動を始める。

皆が我先にと教室の扉から、校舎に散らばっていく様子を、蒼也は席から動くことなく傍観していた。

そんな彼に、後ろから慌てた様子の声かけられる。

「蒼也、なにボートとしてんだよ。早くこの教室から出ていくぞ。でないと処刑されちまう。」

王子は、蒼也の腕を掴み無理矢理、席を立たせようとする。

「このまま、教室にいたほうが良いと思うよ。だって、「」「王子君！」「」」

蒼也の言葉を遮って、王子を呼ぶ声が聞こえた。

声の方向を見ると、麗火を筆頭に、石田 水緒、大西 木の葉、須田 金華、野田 月光、総勢5名による、通称『王子ハーレム』のメンバーが勢揃いしていた。

「そんな人の事を構ってないで、とつとと教室から脱出するわよ！」

麗火率いるハーレムメンバーは、王子の腕を引っ張り、無理矢理連れていく。

王子は、「ちよっ、まっ、蒼也がまだ…」など言葉だけは抵抗しているが、女の子とはいえ、5人がかりの力になすすべもないのか、無理矢理連れていかれてしまった。

「……僕達が出ていなくても、皆が勝手に離れていってくれるって言おうとしたのに……。」

いつの間にか、教室には蒼也を含めて3人しか残っていなかった。

◇とある人物に配られた名簿◇（前書き）

【観覧者の皆様へ】

この度は、当テーマパークの観覧に応募いただき、有り難う御座います。

今回の『箱庭』の参加者が決定致しましたので、名簿をお送りします。

また何か御座いましたら、お手紙をお送りいたしますので、『箱庭』の解禁をお待ち下さい。

◇とある人物に配られた名簿◇

【男子出席名簿】

1. 青木 智治
2. 赤松 賢
3. 宇喜多 務
4. 小田 直哉
5. 上條 進治
6. 岸田 一誠
7. 久遠 雄助
8. 甲田 健介
9. 小島 世界
10. 佐藤 春雷
11. 渋谷 直
12. 鈴木 恭介
13. 瀬川 隣
14. 高遠 蒼也
15. 千葉 翔平
16. 津 理
17. 羽田 太郎
18. 保田 鉄平
19. 山村 王子
20. ワグナー・螺旋

【女子出席名簿】

1. 井上 香
2. 石田 水緒
3. 江角 真央
4. 織原 果歩
5. 大西 木の葉
6. 神林 玲央名
7. 九鳥 杏
8. 左島 姫喜
9. 佐久 咲
10. 佐藤 春風
11. 白鳥 雪姫
12. 須田 金華
13. 天上院 麗火
14. 外川 穂波
15. 猫皮 花梨
16. 野田 月光
17. 柊 万里絵
18. 不和 心
19. 渡辺 忍
20. 輪山 咲良

【その他参加者】

早川 重蔵
真島 圭介
五月雨 千秋

新堂 常夫
賀川 桃
鈴木 匠
神無月 満月
国立 郁夫
皆川 竜助
矢島 里桜

3話…提案と覚悟

苦笑いをしながら、教室から引きずられて行く王子を見送った後、蒼也は教室に残っているクラスメイトに話し掛けた。

「君達は教室を出なくて良かったの？」

「私は出るタイミングを失ったのよ。それに考えてみれば10人以上の人間と近くに居なければいいんだから、わざわざ教室の外に出て行く必要はないのよね…」

そう答えるのは雪姫である。その様子は、先程蒼也に激昂した時よりは幾分落ち着いていたようだ。

実は彼女、他のクラスメイト達と同じように「皆と一緒に教室にいと殺される」という脅迫観念に囚われて、教室から脱出しようとしたのだが、隣に座る蒼也が全く動く様子を見せなかったので、戸惑っている内にタイミングを逃したのである。

「ぼ、ぼくは、腰が抜けて立てないんだ……………」

震えながら返答するのは、教室の一番後ろに座る瀬川 隣である。

彼は超童顔のうえ身長140cmのどう見ても小学生にしか見えな
い、いわゆる「ショタっ娘」というやつだ。クラスでもマスコット
として、男女問わず可愛がられている。最も、本人はマスコット扱
いを嫌がっているようだが…

蒼也とは出席番号が近いこともあり仲が良く、お昼休みなどを一緒
に過ごしたりする。

蒼也は2人の返事を聞き、何度か頷いた後席に座り提案する。

「さっき、みんなが扉に殺到している時にね、ルールブックを読ん
でたんだ。

教室に残ったのも何かの縁だと思うし、よかったら一緒に行動しな
い？」

蒼也のいきなりの提案に2人は、呆氣にとられた。

いち早く正気を取り戻した隣は蒼也に問いかける。

「ちょっと待ってよ、蒼也君。こ、これって本当なのかな？ ドツキ
リとかじゃないのかな？」

「残念ながら本当だろうね。あの死体は本物っぽいし。それに、ドッキリならカメラが出てくるタイミングが遅すぎる。」

雪姫も気を取り直して、蒼也に問う。

「これが現実だっていうのは認めたくは無いけど、理解できたわ。でも、だからって犯人のいうとおりゲームをするっていうの!?!」

「白鳥さんは、家に帰りたいんだろう? だったら、犯人のいうとおりゲームをクリアするのが一番手っ取り早い手段だと思うけど…。それに、僕達の命は犯人に握られてるようなもんだしねえ。」

蒼也の言葉に2人は黙り込む。しばらく沈黙は続くが、雪姫は決意したかのように顔をあげる。

「……私は、家に帰りたい。だからゲームを絶対クリアする。そのためなら……高遠くんと組むことにするわ。」

「ぼくも、帰りたい。ううん、絶対に家に帰る。ぼくもゲームに参加する。」

2人の決意を聞き、蒼也はにっこり微笑む。

「それは良かった。僕の提案が受け入れられて嬉しいよ。さっそくだけど、2人もルールブックを読んだほうがいい。細かいルールが書いてある。」

2人がルールブックを読んでいる間、蒼也は考え事をしているようだった。

雪姫と隣がルールブックを読み終わった頃、蒼也は2人に声を掛けた。

「読み終わったかな？なかなか複雑なルールだよねえ。」

「ええ、そうね。それにクリア条件がいくつかあるみたいね。」

「うん、そうなんだ。同盟を組んだからには、正直に答えて欲しいんだけど…2人は3つのクリア条件の内、どれを目指すつもりだい？」

蒼也が問いかけると、隣は怯えを含ませながらも、無然と答えた。

「ぼくは、3つ目の条件だけは絶対反対だよ！1人だけ生き残って

も意味がない。皆で生き残らないとダメだよ！」

「私もその意見には賛成ね。それに、3つ目の条件を選ぶのなら同盟を組む意味がないわ。」

雪姫も隣の意見を肯定する。

「うん、僕も2人の意見には賛成だよ。すると、1か2の条件を選ぶことになる。1を選べば、うまくいけば死ぬのは鬼だけ。2は、1人しか脱出出来ない。僕としては、1をオススメするけど…問題がある。」

「ええ、鬼が誰なのか見つけなければいけないし、それに鬼を指名する方法が書いてない。」

他にもいくつか疑問があるわね。」

蒼也の言葉を雪姫が引き継ぐ。

「それだけじゃないよ。ルールブックによると、参加者は50名と書いてあった。これは、僕達3年1組の生徒40名と先生達10名のことだと思う。」

ということは、僕達の中に鬼がいるって事。鬼を指名するってことは、その人物を殺すってことだよ？」

雪姫と隣は蒼也の言葉に黙り込む。しかし、蒼也は更に続ける。

「更にいえば、その鬼が悪意を持って、つまり犯人達と繋がっていた場合は罪悪感も少ないかもしれない。けれど、もし鬼がなんにも知らなかった場合は？ 僕達50人の中から偶然選ばれた場合は？ 君達は鬼を指名できるの？」

蒼也が黙り、教室が重たい空気で包まれる。
やがて、隣がおずおずとだが手を挙げ発言する。

「じゃあ、2つ目を目指すっていうのは？ 皆で協力して全員が1000万ポイント稼げるようにするとか…」

「それこそ無理な話だよ。人を殺せばポイントが倍になるってことは、イベントで貰えるポイントは絶対にそれより少なくなるはず。それに、10人以上で近くにはいられない。
仮に全員で1000万ポイントを稼ぐことが出来ても、鬼に先に脱出されたら、残りの人達は脱出出来なくなってしまう。現実的に考えて、皆で脱出は不可能だよ。」

その言葉に、隣も雪姫も黙り込む。蒼也はフォローするように言った。

「僕は別に君たちを脅したくて言ったわけじゃないんだ。ゲームの

クリアを目指すのなら、絶対に誰かしらが死ぬことになるってことを覚えていて欲しいだけさ。」

雪姫と隣は、ゆっくりとその言葉に頷く。まるで、自らの身に刻みこむように…

「今のところ、目標とすべきことはゲームのルールを完全に把握することだ。この本に、ルールが全部書かれている訳ではないらしいからね。」

「放送で言ってたやつね。確か…『ゲームを進める内に別のルールブックが手に入る』だったかしら？」

「うん。でも、一番にするべきことは食料を手に入れることだね。ルールブックには、ポイントで買うことが出来ると書いてある。何処かで売ってる場所があるはずだよ。」

――――――――――隣は、これからの予定を話し合う蒼也と雪姫の姿をボーッと見ていた。

隣は蒼也の事が、友達の中で一番好きだった。皆が自分の事をマスコット扱いしてくるのに、蒼也だけは自分の事を皆と変わらない態度で接してくれる。小さな頃からマスコット扱いされてきた隣にとっては、とても嬉しいことだった。

蒼也は隣の憧れであり、隣は蒼也みたいに成りたくて、暇さえあれば蒼也にくっついていた。

だからこそ、隣は今の蒼也に違和感を抱いていた。

普段の蒼也は、常に冷静で穏やかで、他人の意見を尊重するがこんな風にリーダーシップを発揮する人物ではなかった。

それに、何だか——楽しんでる？——

「どうしたの？隣くん？」

急に蒼也に話しかけられ、悲鳴をあげそうになるが、なんとか顔に出さないように返答する。

「ううん、何でもないよ。」

「そうかい？何だか顔色が悪かったから…。何かあったら言うんだよ？。」

そんな風に自分の事を心配してくれる友人の顔を見ると、隣はとて

つもない罪悪感を感じた。

憧れの人物であり、こんな状況なのに他人の事まで心配することが出来る人を疑うなんて、自分は何て嫌な奴なんだろう…

「これから、購買にいこうと思うんだ。何かあるかもしれないからね。」

「うん、わかった。」

友人の言葉に素直に頷き、後をついていく。

浮かんだ疑惑を、頭から振り払いながら…

4話：天才にして、異質にして、最強

ワグナー・螺旋。この男を知らないものは、早川高校にはいない。

彼は、天才であり、異質であり、最強だった。

螺旋は、軍人であるアメリカ人の父と日本人の母の間に日本で生を受けた。

母は螺旋が幼い頃に病死し、螺旋は軍人である父によって育てられた。

父は、母がいないことで周りに虐められないように、螺旋に厳しい教育と躾を施した。

その教育のおかげか、螺旋はわずか五歳にして、東大レベルの問題を解くことが出来るようになり、「神童」と呼ばれる事になる。

7歳になる頃、螺旋はありとあらゆる知識を修め、学ぶことが無くなった。学校に行っても意味がないし、周囲に話しの合う友人もない。「学ぶ」という目的を失った彼は、周囲に関心を示す事が無くなった。

そんな彼に、転機が訪れる。10歳になった頃、螺旋が買い物に出掛けた時に、偶然ビルからの飛び降り自殺を目撃した。道に横たわる、血塗れの死体。7歳の頃より、心が揺さぶられることの無かった螺旋は、その死体を見て”美しい”と思った。

それからの螺旋は、ひたすら死体のことだけを考えていた。

―もっと死体を見たい。血にまみれた人間が見たい。でも、死体はそう簡単には見つからない。だったら……自分で作ればいい。

結論に至った螺旋は、まず自分の父を殺した。後ろから襲いかかり、包丁で肉を裂き、内臓をぐちゃぐちゃに掻き回して、気がすむまでその死体を見詰めていた。

その後、螺旋は死体を瓶詰めにして偽装工作をした。父は行方不明扱いになり、完全犯罪を成立させた。

父が死んだことにより、螺旋は親戚の家に引き取られることになった。そこでは、表向きは「良い子」を装ったが、裏ではホームレスなどを殺して歪んだ欲望を満たしていた。

中学生になると、螺旋は夜の街に繰り出すようになった。幼い頃に学んだ知識により、人の壊し方はわかっていたので、不良相手に実

践した。

高校生になると、螺旋は不良達のトップに立つことになった。中学生の時に散々人を「壊した」おかげか、螺旋は殺人を犯すことを止めた。

――宇喜多 務と保田 鉄平は教室を出た後、
体育館に向かっていた。

「なあ、本当にこっちで良かったのか？」

務は、鉄平に問いかける。

「ああ。体育館なら広いから、誰かが入ってきててもすぐわかる。それに、逃げやすいしな。」

体育館についた2人は、扉を開けた。開けてしまった。

2人が扉を開けると、中に人がいた。体育館の真ん中に王のようにワグナー・螺旋が存在していた。長い銀髪と190近い身長と神が崩壊したともいわれる容姿を持つ、不良のトップに立つ男。

2人が硬直していると、螺旋は声を発した。

「なあ、お前ら。人間が一番美しい時って、いつだと思う？」

「「はっ？」」

いきなりの問いかけに、反問の声を発する2人に、螺旋は気だるげに近づいた。顔が整い過ぎていて、その気だるげな表情すら一種の芸術に見える。

2人が螺旋に見とれていると、螺旋はおもむろに右手を振るった。

「やっぱり、死体の時が一番美しいと思うんだ。」

そんな言葉が聞こえたとき、務の首から血飛沫が噴き出し、ゆつくりと崩れ落ちる。

鉄平に務の血が雨のように降りかかるが、鉄平は螺旋から視線を外

すことが出来ないでいた。

右手にはナイフを持ち、血にまみれ、恍惚の表情を浮かべる螺旋は、ただ美しかった。

「お前の死体を俺に見せてくれ。」

その言葉と迫りくるナイフを最後に、鉄平の生涯は幕を閉じた。

「あゝ、綺麗だなあ。本当に美しい……」

目の前に転がる2体の死体を、螺旋はうっとり見ていた。まるで、恋人を見るかのように……

螺旋がクラス会に参加したのは、気紛れだった。普段はクラス行事になど参加しないのだが、暇をしてる時に誘いを受け、たまたま参加した。

そのせいで、このゲームに巻き込まれた。初めて参加したクラス行

事でこんなことが起こるなんて…………

「本当にラッキーだよなあ。」

そう呟くと、螺旋は目の前の死体からカードを抜き取り、体育館を後にした

4話：天才にして、異質にして、最強（後書き）

生存者：47名

【死亡者リスト】

宇喜多 務

保田 鉄平

???

???

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9299p/>

箱庭

2011年10月9日22時43分発行